第二回 開架書架から新たな手掛かりを

関　智英

アジア経済研究所図書館（以下、アジ研図書館）の魅力は、経済を専門とする方々には、目まぐるしく変化するアジアに関する新聞・雑誌・書籍類が精力的に蒐集（しゅうしゅう）されている点にあるのだろう。しかし経済分野だけでなく、例えば近現代中国史に関心のある私にとっても、重宝している部分がいくつもある。以下、そうした点を思いつくまま列挙してみよう。

一、外地関係資料の充実

アジ研図書館には戦前の日本の植民地や日本の占領下にあった地域に関する史料も充実している。例えば、満洲国やモンゴルの事情を概観するのに便利な『満洲国現勢』『満洲年鑑』『蒙疆年鑑』、日本占領時期の華中の状況を反映した『大陸年鑑』『華中現勢』といった年鑑類はよく揃っている。さらに『朝鮮総督府統計年表』といった統計、『昭和製鋼所廿年史』といった外地企業の社史、また満洲国初代総務庁長官を務めた駒井徳三の追悼録『麦秋』のように、外地に関わった人々に関連して戦後出版された書籍も積極的に蒐集されている。

二、中国の新編地方誌の充実

中国では一九八〇年代から積極的に省・県レベルで地方誌（民国以前の地方誌に対して新編地方誌と称す）が編纂されているが、これを積極的に蒐集しているのもアジ研図書館の魅力である。図書館北側のエレベーターで四階に下りれば、目の前に地方誌の棚が中国語ピンイン順に整然と並んでいる。NACSIS WEBCATで調べても、ここにしか所蔵されていないものは多い。日本国内で、新編地方誌をここまで系統立てて収めている図書館は少ないであろう。

三、注目したい香港・台湾の雑誌

アジ研図書館には香港や台湾で出版された雑誌も蒐集されている点はうれしい。種類が多いわけではないが、香港の『知識分子』や、台湾の一九八〇年代の自由化以前の出版物（例えば『台北文獻』など）は、あまり日本国内で積極的に集められていない分野で、貴重である。

四、全館開架！

そして右に挙げた三点を最大限生かしてくれるのが、三〇万冊にのぼる蔵書をほぼ全て開架（かいか）で利用できる点である。近年、インターネットを利用した検索機能の充実により、全国の図書館の所蔵状況が容易にわかるようになった。また著作権の問題のない書籍に関してはデジタル画像を公開する動きも進んでいる（アジ研にもデータベース「近現代アジアの中の日本」などがある）。こうした点で、書籍の利用は以前に比べると格段に便利になった。しかし、「書名」「著者名」を基本とした検索で得られる情報は必ずしも十全ではない（「あいまい検索」「予想検索」にも限界がある）。そこでアジ研図書館で私がよく実践するのが、とにかく書架を巡り、気になった本のページを手繰ることである。原始的だがこうして出会った本に、久留島秀三郎の随筆集『つれづれに』がある。題名からではなかなか判断がつかないが、その周囲に中国・満洲に関する書籍が並んでいたので、「もしや」と思い手にしてみたのである。このなかに収録されている「私の武勇伝」という文章は、満洲国建国直後関東軍の馬賊掃蕩に関連して、現地人との交流を回想したもので、私の関心からも大変興味深いものであった。これを書名や著者名から満洲の、それも馬賊に関連した内容だと見当をつけるのは、ほぼ無理であろう。開架で利用できたからこそ得られた発見であった。他に『小松台文存』という本に出会ったのもアジ研図書館であった。このなかにも戦前の大陸に関する文章が多数収められている。

開架か閉架かということは、書籍管理の点では公開方法の違いに過ぎないが、利用者にとって、書籍に関して得られる情報量の違いは歴然で、圧倒的に開架が優れている。書籍の内容はもちろん、本の嵩、紙質、装釘、紙の焼け具合、さらには書香から、どれだけのことがわかり、またどれだけ利用者の五感が刺激されることであろう！　書架を歩きながら、何気なく目にとまった本のなかに新たな事実をみつけ、欣喜雀躍した事はとうてい十指に収まらない。

読みたいと思った時に、すぐにページを手繰れる良さ。まさに小学校の図書室で本と触れ合っていた時と同じ身近な感覚で、専門書を利用できる。実は、国内の専門図書館で、こうした利用ができる場所は、そう多くはない。私にとってアジ研図書館は、単に知りたいことを調べる場としてだけでなく、新たな手掛かりを得られる、知的刺激に満ちた場でもあるのだ。

（せき　ともひで／千葉商科大学講師）